

## ワークショップ②

### 「地域の社会教育施設の連携」

ファシリテーター：

県立長野図書館長 平賀研也

#### 1. 「MLA 連携」

「MLA 連携」というキーワードは、これまでデジタルアーカイブの話として使っていた。それに関しては『社会教育』（社会教育研究会、2014年11月号）に記事を書いたので見てもらえたらと思う。

近年よく耳にするこの「MLA 連携」という言葉。いつ頃出て来たのかと少し調べてみたら、2008年頃急に出てきたようだ。

Museum（博物館）－Library（図書館）

Archives（文書館）の連携というが、主にデジタルアーカイブの視点から語られることが多い。それはもちろん必要なことの一つではあるが、手段と目的を混同し、「連携すること」自体が目的となってしまうはいけない。また、市民を「使う」という視点でもない。



#### 2. そもそも何のために連携するのか。

「連携・協働」という話はビジネスの世界では「提携；アライアンス alliance」と言われる。これは、それぞれの強みを生かして新たな共通の目的に向かって知恵を出し合うこと。その要素としては3つ。

- (1) 新しい顧客を獲得すること
- (2) 新しい技術を獲得すること
- (3) 新規のサービスを創造すること

それらによって、新しい事業領域（ドメイン）への展開が可能となる。

要するに、図書館が今までやってきたことを同じようにやるだけではお客にとっては何も変わらない。今後大切になる事は「地域の多様な主体がつながること」である。そこにおける「主体」とは組織や機能ではなく、思いを持った「人」であるべきではないだろうか。

#### 3. ワークショップ

以下の2点について、参加者の所属館における取組事例などをワークショップ形式で話し合い発表した。

(1) 「連携」「共働」として各館でやっているプログラムにはどんなものがあるか。自館で行っていないければ、知っている事例でも可。

(2) その連携でどういう思いを誰と共有したいか。



参加者からは各館における多様な事例が出された。主な発言は次のとおり。

- ・ビジネス支援として、県の関連部局と連携して相談会の開催や企業への出張展示。
- ・博物館でやっている展示を図書館に持ってきて、資料と一緒に展示。学芸員のセミナーやワークショップ、関連 DVD の上映会。

- ・大学横断系のゆるやかな団体や地元企業と連携し、市民講座やまち歩きを開催。報告を皆で作成・図書館で調査してパネル展示。

- ・大使館と一緒に外交官セミナーや各国の紹介イベントを開催。

- ・図書館で行った事業が有志によってサークル化した。図書館はあくまで入り口、ポータルとしての役割だった。